

ローカル・ソフトパワーとしてのマンガ

—鳥取県の事例を中心として—

Manga as a local soft power

—With a special reference to the cases of Tottori prefecture—

小谷 敏¹

¹大妻女子大学人間関係学部

Satoshi Kotani¹

¹ Department of Human Relations, Otsuma Women's University

2-7-1 Karakida, Tama-shi, Tokyo, Japan 206-8540

キーワード：ローカル・ソフトパワー，水木しげるロード，「まんが王国とっとり」

Key words : Local soft power, Mizuki Sigeru road, "Manga kingdom Tottori"

抄録

アメリカの政治学者、ジョセフ・ナイはソフトパワーを、他の国々に対して強制力を用いることなく、自発的な支持を調達することのできる力と定義している。ソフトパワーとはその国がもつ魅力に他ならない。

アメリカ人エコノミスト、ダグラス・マックグレイが、2002年に『フォーリンポリシー』誌上に発表した、*Japan's Gross National Cool* によって、ソフトパワーということばは、日本社会でも知られるようになった。マンガやアニメ、J-pop にテレビドラマ、さらにはファッション、建築、料理といった日本のポピュラー文化は、1990年代以降、世界で熱狂的な支持を受けている。経済が停滞し、日本が「国内総生産」(GDP)を減退させる一方で、日本の国民総クール(GNC)は目覚ましく上昇していった。80年代の日本が経済におけるスーパーパワーであったように、新しい世紀を迎えた時点の日本は、ソフトパワーの面におけるスーパーパワーとなったとマックグレイは言う。

ソフトパワーとは国際政治学上の概念であった。それをドメスティックな事象に適応することに対してはあるいは違和感を覚える向きもあるかもしれない。しかし、今日の日本の地方自治体は激しい地域間競争に晒されている。経済のソフト化、サービス化が進み、生産拠点の海外への移転が進む現在、かつてのような工場誘致ではなく、第一次産品の地域ブランド化と観光の振興が、どの地域にとっても重要な課題となってきている。その土地のもつ魅力を誇示しなければ自治体の生き残りが不可能な状況が生じている。日本の地域間競争は、ローカル・ソフトパワーの競争であるといえる。

「クールジャパン」の中核をなすものは日本のポピュラー文化であり、とりわけマンガである。地元と縁のアニメやマンガの作品を地域起こしの起爆剤として活用する試みは、全国各地でなされている。そのなかでもっとも目覚ましい成功を収めたのが鳥取県境港市の水木しげるロードである。境港市民と外部の様々な関係者が一体となった努力によって、境港市は妖怪のテーマパークの様相を呈していった。水木しげるロードには現在、年間300万人を超える観光客が訪れている。同ロードはいまや、鳥取砂丘と並ぶ鳥取県を代表する観光地となっている。

鳥取県は2012年に「まんが王国とっとり」の建国を宣言。同県出身の3人の著名マンガ家(水木しげる、谷口ジロー、青山剛昌)を前面に押し立てて、国際マンガ博等、様々なイベントを展開している。しかし「まんが王国とっとり」は現在のところ、鳥取県民のなかに十分な理解を得ているとはいえない。

鳥取県と同じように著名マンガ家を多数輩出し、「まんが王国・土佐」を標榜する高知県は、マンガを描く文化の長い伝統をもっている。そして20年以上のながきにわたって同県で開かれている

「マンガ甲子園」においては、社会批判の視点をもつコママンガを描く課題が参加者たちに課せられている。「まんが王国・土佐」は、「反骨」・「自由」を貴ぶ同県の精神風土とマンガ文化の伝統との結びつきを強調している。「マンガ甲子園」は、その課題を通して、「反骨」・「自由」の気概を若者たちに吹き込もうとしているかにみえる。

他方、鳥取県には普通の人々がマンガを描く文化の伝統もなければ、高知県のように「反骨」・「自由」ということばであらわされるような明確なアイデンティティもない。三人の偉大なマンガ家は有力なメディアではあるが、遺憾ながら「まんが王国とっとり」にそこに託すべきメッセージが存在しない。それが「まんが王国とっとり」の建国に際して、県民の多くが当惑を示した理由のように思われる。

1. ソフトパワーとは何か

「ソフトパワー」とはアメリカの国際政治学者、ジョセフ・ナイが提唱した概念である。ナイは1990年の『不滅の大国アメリカ』のなかで、ベトナムの敗戦や日本の経済的台頭によって生じたアメリカ衰退論に反論している。アメリカの世界的な影響力は第二大戦直後の時期に比べて減退はしたが、いわれるほどの衰退をデータは示していないし、アメリカの優れた大学やハリウッドなどのポピュラー文化の影響力は他に比類のないものであるとナイは主張している。軍事や経済などの古い、堅いパワーだけではなく、文化のような新しい、軟らかいパワーの国際政治における重要性をナイは強調している(Nye1990)。ナイがこの本で提唱した「ソフトパワー」の概念は、冷戦後の国際政治学のなかで、大きな影響力をもつようになっていった。

ナイは2004年に『ソフトパワー』を著し、自らが提唱した概念の精緻化を試みている。ナイはソフトパワーを、他の国々に対して強制力を用いることなく、自発的な支持を調達することのできる力と定義している。ソフトパワーは、自ずとその国を支持したくなる魅力である。その源泉は、「第一が文化であり、他国がその国の文化に魅力を感じることに条件になる。第二が政治的な価値観であり、国内と国外でその価値観に恥じない行動をとっていることに条件になる。第三が外交政策であり、正当で敬意を払われるべきものとみられていることに条件になる」(Nye2004: 訳34頁)。

冷戦後の国際政治における力の多様化と多層化が、ソフトパワーへの注目を生み出した。パワーゲームの頂点をなす軍事面においてアメリカは、ソ連崩壊後の世界のなかで比類のない力を誇っている。しかし中層にある経済面では、中国や日本、EU等々の多様なプレイヤーの意向を無視してアメリカといえども独断的な決定を成しうる状態に

はない。権力ゲームの下層をなす、テロや環境問題、流行病対策、麻薬の取り締まり等々の数多のトランスナショナルな主体の絡む問題の解決に際しては、弱小国や非政府的主体の合意を得ることが不可欠となっている。こうした問題群においては、「力が世界の各国や民間の指導者の間に広く分散していて、極めて複雑になっている。右派と左派の扇動家がともに主張するアメリカ帝国の一極支配とはまったく無縁の世界になっている」

(Nye2004: 訳25頁)。

冷戦後の世界のなかで生じている様々な問題には、弱小国や民間機関もプレイヤーとして参画し、大きな影響力を発揮している。強力な軍事力や経済力にものを言わせて大国が自らの意思を貫き通すことが可能な状況にはない。世界のほとんどの国が、程度の差こそあれ民主化しているから、世論や民意に大きく背く決定はどこの国の政府もとることはできない。世論や民意は強制によって動かせるものではない。その国を自発的に支持したくなるソフトパワーをもつことは、国際政治の舞台において重要な意味をもつ。イラク戦争においては、ベトナム戦争当時よりはるかに迅速に超大国(アメリカ)に対する反対運動が組織化されていった。「国際社会の見方」はインターネットを通して形成され、それが迅速に抗議行動という形で示される時代になったのである。各国の指導者は、力の誇示ではなくことばによって自らの正当性を示さなければならない時代になった。「このように正当性をめぐる戦いが続いていることは、ソフトパワーの重要性を示している。道義性は力の現実となりうるのだ」(Nye2004=訳2004: 25頁)。

2. 「クール」な日本の私—「失われた10年」が生んだソフトパワー大国

2. 1 ダグラス・マクグレイー日本の国民総クール

アメリカ人エコノミスト、ダグラス・マクグレイが、2002年に『フォーリンポリシー』誌上に発表した、*Japan's Gross National Cool* によって、ソフトパワーということばは、日本社会でも知られるようになった (McGray 2002)。日本のマンガやアニメ、J-pop にテレビドラマ、さらにはファッション、建築、料理といったポピュラー文化は、1990年代以降、世界で熱狂的な支持を受けている。経済が停滞し、日本が「国内総生産」(GDP) を減退させる一方で、日本の国民総クール (GNC) は目覚ましく上昇していった。80年代の日本が経済におけるスーパーパワーであったように、新しい世紀を迎えた時点の日本は、ソフトパワーの面におけるスーパーパワーとなったとマクグレイは言う。

1990年代に経済力が衰退するなかで、世界に及ぼす文化的影響力を伸長させていった日本は歴史的に稀有な事例である。ハリウッド映画をはじめとするアメリカのポピュラー文化が世界に広く受け容れられていったのは、アメリカの軍事力と経済力が全盛の時代であった。日本の例外的事態は何故生じ得たのか。1990年代の長期不況によって、金融機関は大口の投資対象を失ってしまった。そして不況下で企業が新規の採用を極端に抑制したために、優秀な若者たちでさえもが、大企業に入る道を閉ざされてしまった。行き場を失った資金と才能がポピュラー文化に投入され、それが90年代に日本におけるポピュラー文化の繚乱を生み出した (McGray 2002=訳 2003: 136-7頁)。

マクグレイはこの論文のなかで、日本のソフトパワーの限界も指摘している。日本にはポピュラー文化というすばらしいソフトパワーを伝達するメディアはある。しかし、日本に魅了された外国人を、迎え入れるような体制が日本には整っていない。ソフトパワーは、その国が体現する価値観の魅力が大きな位置を占めているが (アメリカのポピュラー文化が担ったアメリカ民主主義やアメリカ的生活様式のように)、長く続いた経済の低迷と政治の混乱のために、日本人の価値観は揺らいでいる。日本は、「あふれるようなメディアがありながらメッセージがない状態」に甘んじているとマクグレイは言う (McGray 2002=訳 2003: 140頁)。

2. 2 「ジャパニメーション」から「クールジャパン」へ

マクグレイのこの論文は、アメリカ人が日本を賛美した著作という意味で、かつてのエズラ・ヴォーゲルの『ジャパン・アズ・ナンバーワン』(Vogel 1979=訳 1979) を思わせるものがある。だが、2000年代に流行していたことばは、「クールジャパン」ではなく「ジャパニメーション」(Japanimation) であった。セーラームーン、宮崎アニメ、そしてポケモン... この時代に日本のアニメが世界各地で上映もしくは放映され、大きな人気を博していったのである⁽¹⁾。

「クールジャパン」ということばが広く人口に膾炙するようになったのは、2010年代に入ってからのものである。経済産業省は2010年に製造業局内に「クールジャパン室」を置いた。2012年に発足した第二次安倍政権は、クールジャパン担当大臣のポストを設けた。さらにはコンテンツ産業の海外展開を支援するための官民一体ファンド「海外需要開拓機構」も2013に創設されている。「国策」としてのクールジャパン戦略は、アニメやマンガが代表するポピュラー文化だけではなく、伝統文化を含めた「クールな」日本のイメージを海外に広め、ソフトパワーとして活用していくと同時に、観光客の誘致やコンテンツ産業の海外展開による新たな産業の振興を志向するものであった (経済産業省 HP・クールジャパン・クリエイティブ産業)。

マクグレイの論文は、翻訳が『中央公論』誌上に掲載された2003年当時にも話題になったが、2010年代以降、「クールジャパン」を理論的に基礎づけるために、その価値が「再発見」された側面がある。

80年代のヴォーゲルがそうであったように、マクグレイの日本賛美もいささか過剰なものであった。80年代の日本の自動車産業がアメリカのBIG3に大きな痛手を与えたように、「ジャパニメーション」がディズニーやハリウッドの市場を侵食し、壊滅状態に追いやる事態は生じなかった。だが、日本が世界的にみて好感度の高い国であることもまた事実である。2000年代に入ってから日本のソフトパワーが増大していったというマクグレイの所説を否定することもできない。イギリス BBC 放送が継続して行っている国際的好感度に関する調査で、日本は2007年、20

08年、2012年の3度にわたって、ドイツと並んで「世界によい影響を与えた国」の第一位に選出されている(BBC NEWS HP)。その高い好感度の一因に、マンガやアニメをはじめとする日本のポピュラー文化があることは疑いをみない。

3. 「魅力」を競い合う日本の地方—ローカル・ソフトパワーの方へ

3. 1 ローカル・ソフトパワーとは何か?

ソフトパワーは、国際政治学上の概念である。「ローカルなソフトパワー」とは、レトリックでしかありえない。ではそうしたレトリックはいかなる意味で有効なのか。それを明らかにするために戦後日本における東京と地方の関係と、地域振興政策の変遷について以下にはみることにしたい。

今日の日本では少子高齢化のなかで、「自治体消滅」が叫ばれるほど、東京圏への過剰集積と地方における過疎化とが進行している。国家財政の逼迫から地方は「自立」を迫られている。自立して、「生き残り」をはかるには、地域の経済力を高めることが何よりも重要である。自治体が競うように、工場誘致を行い経済振興を図った時代は過去のものとなった。経済のソフト化、サービス化が進行し、生産拠点の海外への移行が進む中で、地域経済の浮沈を握るものは、製造業から、観光や地域ブランド化した第一次産品に移行している。その土地のもつ「魅力」を際立たせなければ、地域間競争を勝つ抜くことはできない。ナイのソフトパワーとは、その国のもつ魅力の謂いであった。この意味で日本の地方はいま、「生き残り」をかけてのソフトパワーの競争に巻き込まれている。そしてナイは明示的に述べてはいないが、個人であれ、地域であれ、国家レベルにおいてであれ、他者にとって魅力となるものは、すなわち自らにとっての誇りとなる。過疎化が進む地方において、地域住民が誇りをもって生きるためにも、ローカル・ソフトパワーの存在は重要なのである。

3. 2 工業化と均質化—高度経済成長期の国土計画

高度経済成長期の地域振興計画のなかで、地方の魅力や独自性が顧みられることはなかった。1960年に発表された池田内閣の所得倍増計画は、生産拠点を東京圏から北九州に至る「太平洋ベルト地帯」に集積させることを意図したものである。

太平洋ベルト地帯以外の北海道、東北、北陸、山陰、四国、南九州等々の諸地域には人材と食糧の供給基地としての役割が振り当てられていった。太平洋ベルト地帯に偏重した所得倍増計画は、多くの批判に晒されることになった。こうした批判に応える形で、翌61年に作成された全国総合開発計画は、「国土の均衡ある発展」を謳っていた。「拠点開発計画」が打ち出され、全国に34の「新産業都市」が指定されたのである。高度経済成長期の地域開発計画において追及されたものは、日本の工業化であった。とりわけ全総計画においては、工業化を全国に遍く押し広げることによって、国土の均質化を図ったということが出来る。高度経済成長期の国土計画においては、地方の「個性」や「魅力」が顧みられることはなかった(宮本1973)。

3. 3 「地方の時代」—1970年代と80年代

変化は1970年代に訪れている。「地方の時代」ということばを生み出したのも、長洲一二や平松守弘のような指導的な自治体の首長たちであった。70年代は、政治的な面で地方が自己主張を始めた時代ということが出来る。東京、神奈川、大阪、福岡、京都等の主要自治体の首長の多くが、革新系の政治家(その多くが学者出身)によって占められていた。そして繁栄から取り残された地方の人たちは、熊本県の水俣病訴訟に代表される、激しい反公害闘争を展開していた。これら反公害闘争が、国に環境庁の創設と、世界的にみても非常に厳しい環境基準の制定を促したことは疑いをみない。70年代における「地方の反乱」は、高度経済成長期の中央集権主義的な開発至上主義に対する異議申し立てであった。

高度経済成長が終焉した1970年代の日本経済は、ソフト化、サービス化の方へと舵を切っていった。旧国鉄は、1970年に「ディスカバー・ジャパン」のキャンペーンを始める。従来団体客が中心であった日本国内の観光旅行市場のなかで、個人客の掘り起こしを狙ったものである。「日本の発見(ディスカバー・ジャパン)」とは「地方の発見」であり、その最初の担い手たちは、若い女性であった。1970年代後半から80年代の前半にかけて、「anan」や「nonno」を小脇に抱えた若い女性が、両誌において取り上げられたスポットに大挙して訪れる現象が生じた。いわゆる「アン

ノン族」である。「アンノン族」たちによって、津和野、角館、萩等の「小京都」や清里高原、湯布院温泉等の新たな観光地が「発見」された⁽²⁾。

経済のソフト化、サービス化の趨勢を踏まえながら、地方主導の地域開発計画を打ち出したのが、1974年に大分県知事に就任した平松守彦であった。彼は、大分県の全市町村が一つの特産物を生み出す「一村一品」運動を提唱している。この運動のなかから、寂れた温泉街に過ぎなかった湯布院温泉が、アンノン族ブームの追い風を受けて再生を果たした。また、この運動の過程で関アジ、関サバが脚光を浴び、地域ブランドの嚆矢となったのである。「一村一品」には限界もある。農産物なら農産物、工芸品なら工芸品の「一品」だけでは、地域に産業循環を生まないから地域の全体をうるおすことにはならない。しかし、上(官)からの指導だけではなく、そこに住む人たちの創意を導き入れることは、それまでの地域振興政策のなかにはない発想であった。そして「一品」は単なる特産品にはとどまらず、大分県とその自治体の「魅力」を県の内外に示すものでもあった。一村一品運動は、この国におけるローカル・ソフトパワー戦略の嚆矢であったといえる(平松1982)。

3.4 「地域起こし」の方へ

「地方の時代」は、高度経済成長の結果、豊かさが日本全国に遍く均霑された結果生じた現象である。他方、「地方の時代」と言いながら1980年代に起こったことは、東京一極集中であり、東京と他の地方との格差の拡大であった。80年代の末に東京は、世界の金融経済の中心としての地位を確立する。高度経済成長期までは、経済的文化的側面において東京と並び立つ存在であった関西圏も、相対的に地位を低下させ、日本の一地方に成り下がってしまった。

バブル崩壊後の東京圏(およびトヨタの所在する東海地方)以外の日本の地域経済は、深刻な状況に直面していた。中国産の安価な農産物の流入によって、農業は大きな痛手を受け、製造業は人件費のより安い近隣諸国へと生産拠点を移転させていった。折からの規制緩和の進行の結果、郊外に生まれた巨大ショッピングモールに客を奪われて、どこの地方都市でもシャッター商店街はおなじみの光景となった。第一次、第二次、第三次産業のすべてが手詰まりになっていただけではない。

「第四次産業」としてそれまで日本の地域経済を支えていた公共事業も、折からの国と地方の財政状況の悪化によって、大幅に縮小されていったのである。バブル期の放漫なりゾート開発の結果生じた膨大な借金を抱えていた北海道夕張市が、2007年に財政再建団体に転落したことは、「失われた20年」における地方の窮境を象徴する出来事であった。

高度経済成長期からバブルの時代に至るまでの、国が巨額の開発資金を地方に投下し、産業振興を奨励するという「地域振興」政策は過去のものとなった。小泉政権下で進められた平成の大合併が示すように、地方交付金を削減するために、国は自治体の数の大幅な削減の方にさえ動いたのである。国が頼りにできないのであれば、地方は「自力更生」を遂げる他はない。バブル崩壊以降の日本の地方には、「地域起こし」の時代が到来する。行政、地元企業、NPO、さらには地域内外の有志等々が一体となって、地域ブランドの開発、シャッター商店街の活性化、新規農業従事者の受け入れ、等々のおびただしい「地域起こし」の試みが、バブル崩壊以降のこの国の地方で展開されていった。

「地域起こし」が、地域の「生き残り」を賭け、自らの住む地域をより魅力的なものにするための真剣な営みであることは言をまたない。だが、「地域起こし」の担い手が、「若者、よそ者、バカ者」であるということばが示すように、「地域起こし」運動のなかには、成果を得ることを目的とするのと同時に、活動そのものを喜びとするコンサマトリーな、もしくは遊戯的な性格があることを見逃してはならないだろう。論者が「ローカル・ソフトパワー」ということばを用いたように、今日地域間競争は激化しており、「地域起こし」がそれを強く意識したものであることは言をまたない。だが、「地域起こし」運動の競争的側面のみを強調することは誤りである。様々な「地域起こし」グループが、同じ課題をもつ国の内外の運動体との交流を図っている。真剣さと遊戯性。競争と協力。「地域起こし」活動はこうした二面性をもつものである(石井2010)。

3.5 「サブカル」と地域起こし

2000年代に入ると、折からの「クールジャパン」ブームの影響を受けて、サブカルチャーもしくはポピュラーカルチャーが、日本の地方の「地

域起こし」もしくはローカル・ソフトパワー戦略のなかで、大きな位置を占めるようになった。それまで大都市圏の独占物であった、サッカー、バスケットボール、フットサル、野球の独立リーグ等のプロスポーツが、自治体や地域住民の様々なサポートによって大都市圏以外の地方にも根づいていった。いまではやや下火になった感もあるが、B級グルメのブームも記憶に新しい。NHK朝の連続テレビ小説「あまちゃん」を契機として、「ご当地アイドル」が脚光を浴びる。そして、くまモンやひこにゃん、ふなっしーなど、夥しい数の「ゆるキャラ」たちが、「地域起こし」の担い手となるべく誕生したのである（田村2014）。

お堅いイメージの強い、地方自治体の首長（具体的には知事）までもが、「クールジャパン」の時代には（ゆる）キャラ化していった。その嚆矢となったのが、2000年に長野県知事に当選した田中康夫であろう。作家でもある彼は、知事在任中、カモシカのかぶりものを身に就け、「やっしー」と称して、長野県の売り込みに努めていた。「どげんかせんといかん」というキャッチフレーズで、2008年、圧倒的な得票数で宮崎県知事の座についた東国原英夫も知事在任中、「宮崎県の広告塔」をもって任じ、テレビ番組に多数出演し、全国を飛び歩いたのである。九州新幹線の開通時には、くまモンとともに熊本県のPRに歩き、アイドルのスザンヌを熊本県の「観光大使」に任命した蒲山郁夫熊本県知事。そして、日本で唯一スターバックスコーヒーの店舗がないことを逆手にとり、「スタバはないが砂場（鳥取砂丘）はある」という名言（？）で話題になった平井伸治鳥取県知事も、「ゆるきゃら首長」の一人である⁽³⁾。

「クールジャパン」の中核を担うものはマンガとアニメである。そして地域資源としてマンガを活用することにもっとも熱心であったのが平井知事の鳥取県であった。こうしてわれわれは「ローカル・ソフトパワーとしてのマンガ」という本題にたどり着く。

4. 妖怪が連れてきた観光客—水木しげるロードの研究

4.1 日本のマンガ文化を支える地方の存在感

日本のマンガ文化には二重性が存在している。マンガ雑誌やコミックスを出す出版社や、アニメ番組を放映するテレビ局や映画会社等々、マンガ

文化の発信者のほぼすべてが東京に本拠を置いている。IT化の進展によって地方に居住する者も出てきてはいるが、マンガ家たちもその大部分が東京で活動しているのである。戦後マンガの発祥が関西であることは広く知られているが、現在の日本のマンガ文化は、東京文化の一部をなすものだと述べて過言ではないだろう。

だが同時に日本のマンガ文化は地方に大きく依存している部分がある。日本のマンガ文化の基を築いたのは、水木しげる（鳥取）、石ノ森章太郎（宮城）、赤塚不二夫（新潟）、藤子不二雄（富山）等々、地方出身者であった。時代が下っても、高橋留美子（新潟）、青山剛昌（鳥取）等々、地方は重要なマンガ家の輩出基盤となってきたのである。そして多くのアニメやマンガが、物語の背景として日本の地方の景観を背景として借用してきた。日本のマンガアニメ産業は、二重の意味で地方に依存してきたのである。

日本のマンガやアニメはなぜ、地方の景観を背景として借用してきたのであろうか。岡本健はその理由を次のように説明している。アニメの多くが何げない日常を背景としたものであるが、それをオリジナルに描き出すことには大きなエネルギーがいる。そこでクリエイターたちは、日本の様々な地域の光景をそのまま借用するようになった。どのアニメ作品にも熱狂的なファンが存在する。彼、彼女らにとっては、何の変哲もない日本の地域が「聖地」となりうる。現在の若者たちのアイデンティティ形成にとってアニメやマンガは大きな役割を果たしているから、その作品の舞台となった土地はまさに「聖地」であり、そこを訪れる行為は「巡礼」という宗教的行為に等しいものともいえると岡本は述べている（岡本2013：55頁）。

「聖地巡礼」の若者たちを取り込んで、その地域をいわば巡礼者たちにとっての「門前町」にしようという試みが多くの地域でなされている。そのもっとも著名な例として岡本は、「ラキ☆スタ」の舞台となった埼玉県鷲宮市を上げている。同市の商工会の公用車は「ラキ☆スタ」の「痛車」。商店街には関連のグッズが溢れ、数多のオタク関連のイベントが実施される。同市は、あたかも「ラキ☆スタ」のテーマパークであるかのような様相を呈している（岡本2013：45頁）。鷲宮市の事例は、アニメの背景として描かれ、その作品のファンにとっての「聖地」となった地域を観光地

化する、「コンテンツツーリズム」の顕著な成功例といえることができる。

他方、地元出身のマンガ家を観光資源として大きな成功を収めた代表例が、鳥取県境港市の水木しげるロードである。

4. 2 水木しげるロードの誕生⁽⁴⁾

水木しげるを生んだ鳥取県境港市は、人口3万7000人の江戸期からの歴史をもつ港町である。20世紀の末ごろまではいわしの豊漁が続き、地元経済の主力を担っていた水産加工業は好調で、市の財政状態も良好であった。他方、生活の郊外化と、大型店の進出によって、境港の駅前商店街の衰退は深刻なものとなっていた。駅前商店街に妖怪のブロンズ像を設置するプランは、境港の再開発プランを話し合う、「緑と文化の街づくりフォーラム」で水木しげる氏自身から提案されたものである。水木しげるロードのシンボルとも呼ぶべき妖怪ブロンズ像は、当初は観光資源としてではなく、商店街活性化の切り札として構想されていた。妖怪のブロンズ像設置の提案は、むしろ不気味で客足が遠のくと、当初は商店主たちからの反発にあっていた。

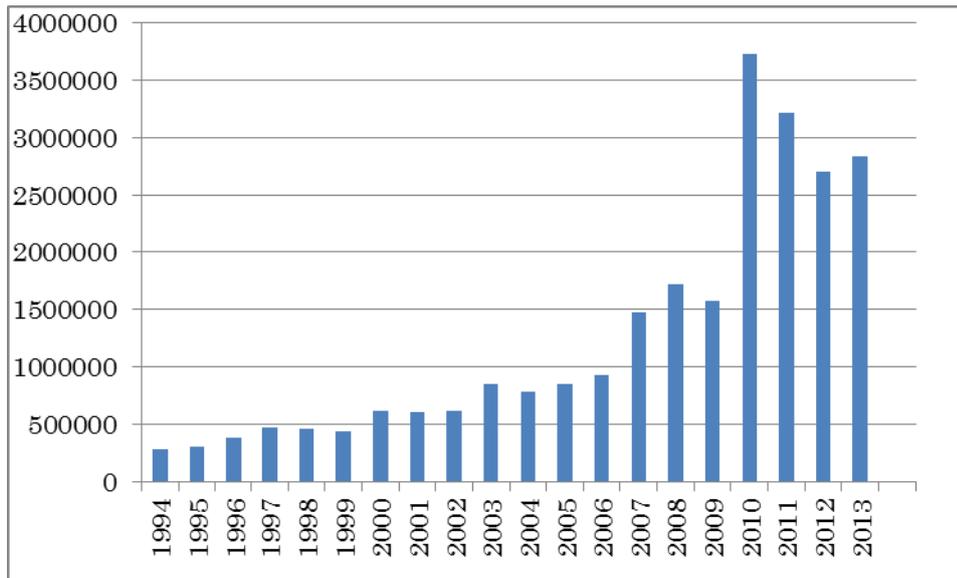
商店主たちからの抵抗にあいながらも、1992年にはねずみ男、目玉おやじ等6体のブロンズ像が松ヶ谷町南側歩道に置かれた。そして、翌93年7月には水木しげるロード200メートルに23体のブロンズ像が置かれ、水木しげる氏を招待しての開幕式典が行われた。ところが式典の3日後にブロンズ像が盗まれてしまう。この事件がマスメディアで大きく取り上げられることによって、県の内外から多くの見物客が、境港を訪れるようになった。いまや鳥取砂丘と並ぶ鳥取県の大観光地である水木しげるロードは、当初それを構想した人たちの「意図せざる結果」から生まれた。ブロンズ像が破壊されるという禍は、水木しげるロードの名を世に知らしめ、多くの観光客を呼び込む「福」に転じていったのである。

水木しげるロード誕生に先立つ1991年には、水木の子どもの時代を描いた自伝的作品、「のんのんばあとオレ」がNHK総合テレビで5回にわたって放映されている。94年には同じくNHK総合テレビで「続のんのんばあとオレ」が放映されている。「のんのんばあ」とは、少年時代の水木を妖怪の世界に導いた老婆である。公共放送であるNHKが、境港＝水木しげる＝妖怪、というイメージを醸成していった。このことは誕生したばかりの水木しげるロードが観光地に育っていく上での大きな力となった。JR西日本も、妖怪のラッピング列車を2003年の10月から境港線で走らせることによって、水木しげるロードの観光地化に力を貸していった。

4. 3 「シナジー効果」が生んだ「妖怪のテーマパーク」

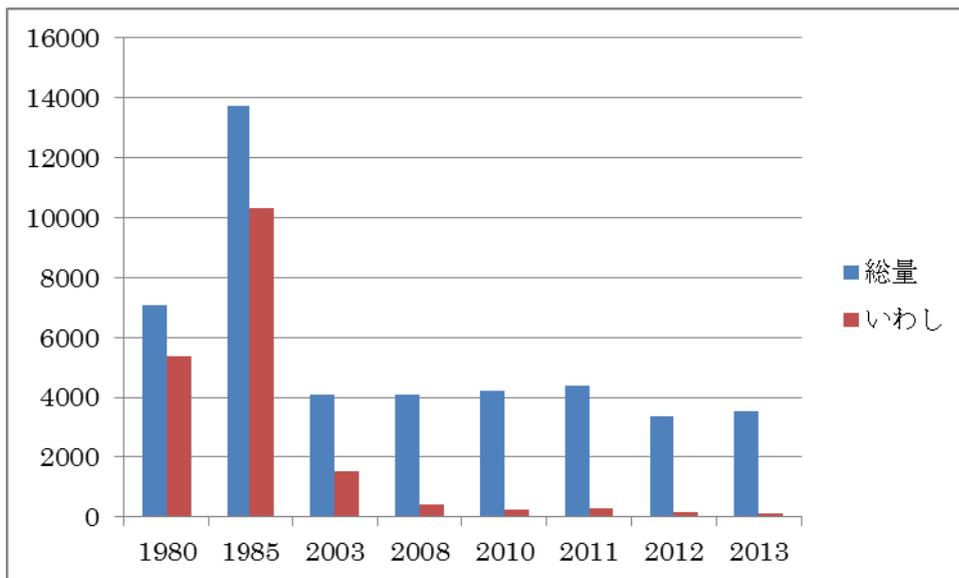
図1に示したように、水木しげるロードは、1993年の開設以来順調に入れ込み客数を増やしてきた。2003年には、水木しげる記念館も完成している。しかし、図2が示すように、境港の漁獲高は、2000年代に入るところには、ピーク時であった1985年当時と比較して、総量で3分の1以下に減少している。かつては漁獲高の7割強を占めていたいわしの減少は著しく、2003年にはピーク時の7分の1程度にまで落ち込んでいる。この漁獲高の減少は水産業と水産加工業を主要な担い手とする境港市の地域経済にとっての大きな痛手となった。境港市の財政状態も悪化し、水木しげる記念館の完成以降、水木しげるロードに対する大規模な税金の投入は困難な状況が生じていたのである。

図1 水木しげるロード入れ込み客数の推移



(単位 人) 資料出所 境港市商工観光課

図2 境港市の漁獲量の推移



(単位 トン) 資料出所 「境港の水産」平成25年版

市の援助が期待できない状況のなかで民間の活力と創意が生かされていった。境港市観光協会を中心とする「妖怪ブロンズ像設置委員会」は、2004年10月に妖怪ブロンズ像のスポンサーを一体100万円で公募をする。この試みは、マスメディアやネット上で大きな話題を呼んだ。当初の悲観的な見通しに反して、呼びかけから1年余りで、多くのスポンサーが集まり、29体のブロンズ像が設置された。2015年現在で、水木し

げるロードの妖怪ブロンズ像の総数は153体に達している。妖怪ブロンズ像の公募は、水木しげるロードへの観光客を呼び込む一助となった。市の財政状況の悪化という「禍」はここでも「福」に転じたのである。

2000年代に入ってから境港市は、様々な主体の合力によって、妖怪のテーマパークへと変容していった。2000年には郵政省が、境港市内に投函した郵便には妖怪の消印がもらえる「妖

怪ポスト」を設置。2002年以来、境港市は住民票の透かしの図案に、水木マンガの妖怪を採用している。2005年にはJR西日本が、境港線を観光路線化し、沿線の15の駅に水木マンガの登場人物の名前を冠している（米子駅はねずみ男駅、境港駅は鬼太郎駅）。2006年に隠岐汽船は、境港・隠岐の島間に「鬼太郎フェリー」を就航させている。鳥取県警は同年に境港市内に「鬼太郎交番」を設置している。2007年に境港に近接する航空自衛隊美保基地は、航空機3機に鬼太郎の記念塗装を実施した。2010年には米子空港も「鬼太郎空港」の愛称使用を始めている。行政も、鉄道も、海上輸送機関も、空港も、警察や自衛隊までもが一体となって、境港の街を妖怪一色に塗りつぶしていったのである。

2008年には、「妖怪川柳コンテスト」、「境港妖怪検定」、「妖怪そっくりコンテスト」等々の現在にも続くイベントが次々に始まっている。境港の町が妖怪一色に染められていく様や、同市で開かれる妖怪がらみの新奇なイベントの数々が、メディアによって全国に大きく伝えられていった。水木しげるロードと水木しげる記念館の魅力だけではなく、多様な主体の試みが醸し出すシナジー（相乗）効果が、水木しげるロードを一大観光地に仕立て上げたのである。

2000年代の後半には、水木しげると関わりのある作品の作成、もしくはリメイク、リバイバル上（放）映が相次いだ。映画「妖怪大戦争」（2005）。アニメ「ゲゲゲの鬼太郎」の5回目のリメイク版放映（2006）。映画実写版「ゲゲゲの鬼太郎」公開（2006）。アニメ「墓場の鬼太郎」（全11回）放映開始（2007）。水木しげるロードが一大観光地となり、大きな話題を呼んだことによって、水木しげるの作品が再び注目されるようになった。そして水木しげるゆかりの作品が次々と放（上）映されることによって、水木しげるロードへの関心がさらに高まっていくという循環現象が生じたのである。

2010年の4月からNHKで放送された「ゲゲゲの女房」は、境港市の観光客の入れ込み数を爆発的に増大させた。この年には372万人が水木しげるロードを訪れている。水木しげる記念館の来場者数も41万1千人に達し、同館の年間収益は1億6千900万円に及んでいる（表1）。「ゲゲゲの女房」効果によって、同ロードは、水木作品のファンや、家族連れだけではなく、高齢者をも含む全年齢層をも引き付ける観光地へと変容していった。

表1 水木しげる記念館の入館者数と収益の推移

年	人数	収益（収入－運営費）	備考
2003年	197,747(人)	7,000(万円)	
2004年	172,984	2,900	
2005年	188,616	4,200	
2006年	198,694	3,800	
2007年	274,638	9,500	11月5日に累計100万人突破
2008年	308,058	9,300	
2009年	252,789	7,200	
2010年	411,006	16,900	ゲゲゲの女房効果。 12月30日に累計200万人突破。
2011	295,487	10,500	
2012	243,334	8,900	3月8日（水木しげる90歳の誕生日）にリニューアルオープン。
2013	259,369	9,800	

資料出所 境港市観光協会

4. 4 妖怪たちがもたらしたもの

鳥取砂丘をも凌ぐ一大観光地となった水木しげるロードがもたらした境港，米子両市への経済効果は，58億円と推計されている。水木しげるロードは鳥取県中部から，大山，隠岐，松江，出雲に至る広域の観光県に観光客を吸引する「目玉商品」としての役割を果たしている。水木しげるロードの経済効果にも限界はある。境港市には大きなホテルがなく，有名な皆生温泉が近接しているために，宿泊客が少ない恨みがある。本来，水木しげるロードは市内の商店街の活性化のために始まったものであるが，同ロード以外の商店街の衰退に歯止めがかかってはいない。筆者がロードを歩いた印象でも，米子や松江，さらには大阪等の企業のテナントショップが増えており，ロードに落とされたお金が地域で循環しているのかが，いささか心もとなく感じられた。また，境港市は「魚と妖怪の町」を標榜しているが，水産資源と観光業を連携する試みは具体化していない⁽⁵⁾。

しかしながら水木しげるロードは，経済的な側面においてのみ，境港市民に対してエンパワメントを果たしたのではなかった。前項で示したように，21世紀に入ってからいわしの漁獲量が激減し，境港市の基幹産業である水産業と水産加工業は壊滅的な打撃を受けた。それと同時期に水木しげるロードが活況を呈していったのである。いわしが去った後に，妖怪が観光客を連れてきた。そして水木しげるロードの成功は，全国の人々の耳目を集めたのである。水木しげるロードの経済効果は大きかった。だがそれ以上に，境港市の名前を全国に知らしめ，深刻な地域経済の地盤沈下に苦しむ市民たちの気持ちを明るくさせた功績を忘れるべきではない。

2000年代に入ってからいわしの漁獲高の減少は全国的な現象であった。鹿児島県北部の港町阿久根市も，境港と同様の現象に苦しんでいた。同市は，九州新幹線鹿児島ルートからも外され，地域経済の沈滞にさらに拍車がかかっていった。そうしたなかで，2008年には竹原信一が市長に当選している。公務員の大幅な給与引き下げを公約に掲げて市長の座についた竹原は，「薩摩の独裁者」を自称。ブログで市職員の給与を公開し，議会を無視して予算や人事の一切を市長の独断的な「専権処分」で処理していった。結局竹原市長は住民投票で解職されている。いわしが去って基幹産業の水産業と水産加工業が痛手を受けるなか

で，鉄道の基幹路線が去り，地域の将来の光明を見出し得ない状況であったが故に，阿久根市民は「独裁者」を自認する人物を市長の座に据えたのではないかと（平井2010）。

折からの平成の大合併の潮流の中で，境港市も米子市との間で合併の話が持ち上がっている。結局，2003年7月20日に行われた住民投票の結果，米子市との合併協議会設置案は否決され，境港市は単独で存続していくことが決まった（米子市HP）。もし境港市が阿久根市と同様，水木しげるロードが存在せず，地域に光明の見出せない状況にあれば，住民投票の結果はまた違ったものになっていたのではないだろうか。またこの時の住民投票で米子市との合併の方向に進み，「米子市境港」となった後にも，水木しげるロードは，いまと同じ輝きを放っていたのだろうか。一考に値する問いといえる⁽⁶⁾。

5. 「まんが王国とっとり」の困難と希望

5. 1 「まんが王国とっとり」

鳥取県は，鳥取市を中心とする東部，倉吉市を中心とする中部，米子市を中心とする西部の3地域に区分される。西部地区の境港が生んだマンガ家が水木しげるであれば，中部地域には「名探偵コナン」で知られる青山剛昌がいる。青山を生んだ東伯郡北栄町（合併以前の地名は大栄町）では，2007年には「青山剛昌ふるさと館」を開設。2015年の春の大型連休中に累計で60万人の来訪者を記録している。また，JR山陰本線由良（コナン駅）から，同館に近接した道の駅大栄までの約1.4キロの道沿いに，コナン縁のブロンズ像や石像を配置している。また県庁所在地でもある東部の鳥取市は，とくに欧州で評価の高いマンガ家，谷口ジローを輩出している。

鳥取県は，2010年の国際マンガサミットを米子市に誘致しているが，その意図について同県は次のように説明している。「国内外で人気の高い水木しげる先生，谷口ジロー先生，青山剛昌先生がいずれも鳥取県ゆかりの漫画家でいらっしゃることに着目するとともに，これまで境港市や北栄町をはじめとする市町村で積み重ねられてきた地域活性化や観光振興の取組を圏域全体で一層推進することを目的として，鳥取県は『第13回国際マンガサミット』の誘致に取り組み，これに成功しました」（まんが王国とっとり公式HP）。鳥取県

は境港市と北栄町の成功事例を受けて、同県出身のマンガ家を地域資源として活用し、マンガによって県勢を浮揚させる試みに取り組んでいく。「国際マンガサミットの開催を一過性のものとせず、これまで積み重ねてきたマンガの活用をさらに発展させるため、国際マンガサミットを開催する平成24(2012)年を「まんが王国とっとり」建国の年と位置づけ、「国際マンガ博」の開催ほか、さまざまな取組をはじめました」(まんが王国とっとり公式HP)。境港市の試みが民間セクターをも含む、多くの主体の合力によって達成されたのに対して、「まんが王国とっとり」は、その出発点において鳥取県、すなわち行政主導のプロジェクトであった。

まんが王国建国イベントとして企画され、10億円の県費を投じて県内各地で開かれた2012年の国際マンガ博は、主催者の鳥取県は300万人が来場したとしている。また同県は、マンガによる「観光振興」・「産業振興」・「文化振興」をまんが王国建国の目的として掲げ、鳥取空港の「鳥取砂丘コナン空港への改称」(観光振興)、境港市出身のクリエイター赤井孝美による株式会社米子ガイナックスの設立やフィギュア業界の雄、グッドスマイルカンパニーの倉吉市への誘致(産業振興)、国際マンガコンテストの開催やとっとり絵師人材バンクの創設(文化振興と後継者育成)等の多彩な事業を展開している。また鳥取県と同じように多くのマンガ家を輩出し、「まんが王国・土佐」を標榜する高知県との合同事業も活発に行っている。さらにマンガを通じてわかりやすく県の活動

を伝えることも、「まんが王国」の活動の柱とされている。

まんが王国建国当時、鳥取県民の受け止め方は概ね好意的であった。地元紙は、「王国推進、8割が賛成 日本海100人モニター」(日本海新聞2012.03.27)と報じている。まんが王国の推進について積極・消極をあわせて8割が支持を表明していた。一方で、地元の識者は、新聞紙上に次のような意見を寄せている。「ただ個人的にはまんが王国がどういうものなのか今一つイメージできません。イベントによって人を呼び込もうというのはわかります。まんがコンテンツを産業化しようというの分かります。でも多くの県民にとって、観光客がお金を落とすとしていく以外に何があるのかな?と思ったりしています」

(松本薫「まんがの力を教育に」『日本海新聞』2012.03.13)。また、まんが博に関しては、「王国」建国の理念は伝わらず、3人(水木、谷口、青山)の偉業を拝借しただけという批判も寄せられていた(2012.03.22『山陰中央新報』)。まんがを基軸とした鳥取県の振興というプランには賛成だが、「まんが王国」によって県が何をやろうとしているのかは定かではない、という当時の県民の意識のありようが浮かんでくる。国際まんが博に対しても、鳥取県が行った300万人という来場者の見積もりは誇大なものであり、会場では閑古鳥が鳴いていると揶揄する声がネット上では少なからず上がっていた。

表2 まんが王国鳥取関連年表

年月日	事項
2010.02.19	鳥取県が第13回国際マンガサミットの国内候補地に決まる
2010.03.29	NHK朝の連続テレビ小説「ゲゲゲの女房」放映開始
2010.04.26	米子空港が「米子鬼太郎空港」の愛称を採用
2011.07.08	山陰コンテンツビジネスパーク協議会設立
2011.09.23	第一回米子映画事変
2012.01.01	まんが王国鳥取建国
2012.05.12	トットリンドル女王即位式典(都内)
2012.08.04	国際まんが博開催(至11.25)
2012.11.07	国際マンガサミット鳥取開催(於米子市 至11.11)

2012.11.08	第1回国際マンガコンテスト表彰式
2013.05.21	高知県とまんが王国通商条約締結
2013.07	岩美町が舞台のアニメ「フリー」、東京 MX テレビ等で放映開始
2013.07.13	マンガ博乙開催 (至08.25)
2013.10.14	高知県との「まんが王国会議」を開催
2013.12.15	JR 山陰本線由良駅が「コナン駅」の愛称を採用
2014	青山剛昌『名探偵コナン』少年サンデー連載20周年
2014.02.01	米子に「ガイナックスシアター」誕生
2014.05.12	米子ガイナックス株式会社設立登記
2014.06.26	グッドスマイルカンパニー倉吉誘致調印 (同年12.05 操業開始)
2015.02.06	まんが王国とっとり絵師人材バンク設立
2015.03.01	鳥取砂丘コナン空港オープニングセレモニー

資料出所 「まんが王国鳥取公式 HP」より作成

5.2 「まんが王国・土佐」

高知県もやはり「まんが王国・土佐」を標榜している。同県には昭和20年代から県紙の高知新聞がマンガコンクールを主催するなど、普通の人々がマンガを描く文化が根づいていた。高等学校の部活動にも早くからマンガは取り入れられており、1988年には、15校（2011年現在では30校・高知県の高等学校の数は約40校）が参加して、高知県高等学校文化連盟漫画部門が発足し、同県香美町出身のやなせたかしの全面協力のもとに、同年には「高知まんがフェスティバル」を開催。これをリニューアルする形で1992年に「第一回全国高等学校漫画選手権大会」が開催され、現在に至るまで続いている。

1996年には、やなせの父親の故郷香美市に「やなせたかし記念館・アンパンマンミュージアム」が開館。99年には高知市の市電（土佐電鉄）に地元出身の横山隆一のキャラクターを使用した「ふくちゃん電車」が走っている。翌2000年には土讃本線（高知～岡山間）にアンパンマン列車が登場。水木しげるロードの後を追う形で、高知県も出身マンガ家とその作品を観光資源として活用する方向に乗り出していった。2010年には高知県庁に「まんが・コンテンツ課」を設置し、2012年には「まんが王国・土佐推進協議会」を発足させ、「まんが王国とっとり」との合同イベ

ントを開催していることは、「まんが王国とっとり」を論じた部分ですでにみたとおりである。「まんが王国・土佐」は独自事業として、高知県出身者を中心に、多くのマンガ家、マンガ編集者が集う「全国漫画家大会議」を2014、2015両年に開催している。

「まんが王国・土佐」の公式ホームページには、次のように記されている。「王国の文化は日々『感動』『自由』『反骨』を追及する国民によってつくられています」。坂本龍馬らが推進した明治維新。板垣退助や植木枝盛らによる自由民権運動。これらの歴史的偉業のなかで示された、「自由」を求める「反骨」精神は、土佐人のアイデンティティの根幹をなすものである。高知県のまんが文化が「自由」と「反骨」の精神風土に根差したものであるという、上記の文章には説得力がある。アンパンマンで知られるやなせたかしの一貫した反戦思想は、広く知られている。高校卒業後単身で高知を飛び出し、マンガ家として身を立て、アルコール依存症で凄絶な最期をとげた戦場カメラマンの元夫に寄り添った西原理恵子の生き方は、「自由」を求める「反骨」精神に貫かれたものであった。（表3）に示したように、「まんが甲子園」は一貫して社会的なテーマを掲げているし、歴代優勝校の作品はいずれも、苦く黒いユーモアを湛えたものであった。

表3 まんが甲子園のテーマと優勝校

回数(年次)	決勝戦テーマ	最優秀賞受賞校
第1回(1992)	一番の日	初芝高校(大阪府・私立)
第2回(1993)	家族	岡豊高校(高知県立)
第3回(1994)	新・いなか	小倉東高校(福岡県立)
第4回(1995)	ニューメディア	上田高校(長野県立)
第5回(1996)	ルーツ	栃木高校(栃木県立)
第6回(1997)	携帯○○	昭和薬科大学附属高校(沖縄・県私立)
第7回(1998)	教育	芸術高校(東京都立)
第8回(1999)	老人力	高岡高校(高知県立)
第9回(2000)	17歳	松橋高校(熊本県立)
第10回(2001)	伝統	東北高校(宮城県・私立)
第11回(2002)	本音	栃木高校(栃木県立)
第12回(2003)	オンリーワン	高崎東高校(群馬県立)
第13回(2004)	BUSHIDO(武士道)	西南学院高校(福岡県・私立)
第14回(2005)	本物	高岡工芸高校(富山県立)
第15回(2006)	秋葉原	那覇工業高校(沖縄県立)
第16回(2007)	世代交代	志貴野高校(富山県立)
第17回(2008)	偽装	多治見西高校(岐阜県)
第18回(2009)	絶滅危惧種	伊東高校城ヶ崎分校(静岡県立)
第19回(2010)	あしたの○○	豊明高校(愛知県立)
第20回(2011)	第100回まんが甲子園	栃木女子高校(栃木県立)
第21回(2012)	まんが県	九州産業大学附属高校(福岡県・私立)
第22回(2013)	もっといい色のメダル	伊東高校城ヶ崎分校(静岡県立)
第23回(2014)	拡大解釈	大宮南高校(埼玉県立)

5.3 「まんが王国」の困難

ここで鳥取と高知、二つの「まんが王国」の比較を行ってみたい。鳥取県境港市の水木しげるロードは、観光資源として地元出身のマンガ家とその作品を生かすことについての見事な成功例である。すでにみたように、その成功は、様々な主体の協働によって、境港を妖怪のテーマパークとして、全国に発信することによってもたらされた。だが、水木しげるロードを、鳥取県民全体が「自分たちのもの」と感じているかといえば疑問とせざるを得ない。鳥取県は因幡伯耆の二国からなっている。鳥取を中心とする東部、倉吉を中心とする中部とする西部、米子を中心とする西部は、それぞれに独特な地域性をもち、競争意識も強い。鳥取県東部に育った著者の実感としては、境港市

の成功事例をわが事として喜ぶ感覚は、東部地域に属する鳥取市民には希薄である。鳥取空港が「鳥取砂丘コナン空港」と改称した時、鳥取市民の間からは、「青山剛昌は中部の人だ」と違和感を語る声が多かったことは象徴的である。鳥取県民の意識のなかでも、偉大な3人のマンガ家たちは、「鳥取県の」ではなく、東部の谷口、中部の青山、西部の水木に留まっている感は否めない⁽⁷⁾。

高知県はかつての土佐の国がほぼそのまま県になっている。県民の一体感は強い。高知県が生んだ著名マンガ家の出身市町村は多岐にわたっているが、彼らはいずれも「土佐のマンガ家」なのである。高知県の「描く」文化を育んだのは、県紙である高知新聞であり、県立高校漫画部の指導者たちであった。高知のマンガ文化は県というまと

まりで育まれてきたといえる。

鳥取県には高知県のような普通の人たちが「描く」マンガ文化は根づいてはいない。30校が高校文化連盟の漫画部門に加盟している高知県とは違って、「まんが王国」を標榜する鳥取県の高校文化連盟には漫画部門そのものがない。高知県の場合は、昭和20年代から「描く文化」が根づいていたのだから、戦後世代の優れたマンガ家はそうした土壌のなかから生み出されたといえるかもしれない。他方、鳥取県にはそうした土壌はない。高知県は、高知のマンガ文化と土佐の国の「自由」・「反骨」の伝統とを結びつけていた⁽⁸⁾。高知県のマンガに関わる人たちは、20年以上続く「まんが甲子園」においては、社会性の高い課題を与え、辛辣なもののみかたを推奨することによって、「自由」・「反骨」の精神を全国の「高校ペン児」

たちの間に育んでいったのである⁽⁹⁾。

他方、明治維新の偉業にも、自由民権運動の高揚とも無縁な鳥取県には、高知県の「自由」・「反骨」に相当するアイデンティティがない。マックグレイが「クールジャパン」について述べたことに倣えば、「まんが王国とっとり」は、水木、谷口、青山という強力なメディアをもちながら、高知県における「自由」・「反骨」のような、そこに託すべきメッセージをもたないのである。

「鳥取県(民)」という一体感の希薄さ。マンガを描く文化の不在。そして「まんが王国」の活動を通して発信すべきメッセージの不在。まんが王国の発足に際して、多くの鳥取県民がそれを支持しながらも、何を意図しているのかわからないという戸惑いを覚えたことも故なしとはしない。

表4. 「まんが王国とっとり」と「まんが王国・土佐」の比較

事項	まんが王国とっとり	まんが王国・土佐
建国	2012年	2012年
県庁の担当部局	まんが王国官房(文化観光スポーツ局)	まんが・コンテンツ課(文化生活部)
建国の理念	国際マンガサミットの成果を一過性のものに終わらせず、水木、谷口、青山を育んだマンガ文化の伝統を継承する。	王国の文化は日々「感動」「自由」「反骨」を追及する国民によってつくられています(公式HP)
県出身の著名マンガ家・アニメーター	水木しげる(境港市) 谷口ジロー(鳥取市) 青山剛昌(北栄町・旧大栄町) 山松ゆうきち(倉吉市) しのだひでお(鳥取市) 赤井孝美(米子市)	横山隆一(故人・高知市) 横山泰(故人・高知市) やなせたかし(故人・高知市) はらたいら(香美市・旧土佐山田町) 青柳祐介(香南市・旧野市町) 西原理恵子(高知市) 黒鉄ヒロシ(佐川町)
県下のマンガ関連施設	水木しげるロード(境港市) 水木しげる記念館(境港市) 青山剛昌ふるさと館(北栄町)	横山隆一マンガ記念館(高知市) やなせたかし記念館・アンパンマンミュージアム・誌とメルヘン記念館(香美市) 四万十フィギュア館(四万十市)
主要イベント	国際まんが博(2012) 国際マンガサミット(2012) 国際マンガ博乙(2013) 国際マンガコンテスト(2013～現在)	まんが甲子園(1992～現在) 漫画家大会議(2014・15)
誘致したコンテンツ産業	米子ガイナックス(2012) グッドスマイルカンパニー(2014)	
両県合同事業	「高知×鳥取 マンガ王国会議イン akiba」(2013・2014)	

5. 4 ソフトパワー立県の方へ「まんが王国とっとり」の希望

「まんが王国とっとり」は、同県の平井知事の強力なリーダーシップのもとで進められていった。平井知事はみずからメディアに積極的に露出して、「まんが王国」の宣伝塔としての役割を演じたのである。2012年5月12日の東京におけるトットリンドル女王（モデルのトリンドル怜奈）即位式においては、執事姿で登場し、「新女王」をエスコートした。選挙で選ばれた知事が、若い女性の小間使いのように振る舞うことに対して、県民のなかからは「みっともない」という批判の声があがった。これを平井知事は、「お叱りを受けるぐらい効果があった」（「朝日新聞鳥取版」2012.05.22）と受け流している。

平井知事はまた、AKB48のキャッチフレーズを模して、「日本一会いやすい知事」を標榜している。鳥根県にスターボックスが出店し、鳥取県が最後のスターボックス空白県となった時にも、「（鳥取県には）スタバはないが、大きな砂場がある」と発言し、メディアで大きく注目され、話題になった。東国原元宮崎県知事に替って、今日「首長のゆるキャラ化」の先頭を走っているのが、鳥取県の平井知事であるとさえいえる。

平井知事は、2007年に鳥取県の副知事から、前任の片山善博知事の退任を受けて知事に就任した。片山前知事は厳しい財政削減を行う一方で、全国的にみて先進的な情報公開を行った。韓国との県民レベルでの国際交流を推し進め、らい予防法による犠牲になった人々への謝罪とハンセン氏病への偏見を取り除くための啓発活動を活発に行った。日本初の人権保護条例の制定に尽力したのである。また人形峠近くの集落にウラン残土の不法投棄を続けてきた動燃と中国電力を相手どった住民訴訟を県として支援している⁽¹⁰⁾。

経済的には痛みを求めを求めながらも、高い公開性と公平性の原則のもとに「改革」を推し進めることによって、片山県政は常に高い支持を得ていた。鳥取は「改革」の先進地として注目されていった。その意味で片山知事は、鳥取県の「ソフトパワー」の源泉でもあった。片山知事の目指したところは、地域経済の発展よりはむしろ、鳥取を公正な政治と文化（国際交流）、そして人権の先進地とするという「ソフトパワー立県」ともいべきものであり、鳥取県民は同知事の在任中、一貫してこれに支持を与えてきた⁽¹¹⁾。

平井知事は、「ソフトパワー立県」という前知事が示した方向性を、よりソフトな、もしくはサブカル的な方向性において継承したとみることがができる。その上に立ったマンガという文化の力による経済振興（観光およびコンテンツ産業の振興）を目指したのが、「まんが王国とっとり」だったのではないかと。前県政以来の鳥取を文化と人権と公正な政治の先進県にするという企てが実を結び、そこから生まれた理念に高知の「自由」・「反骨」のような名前が与えられ、それが様々なイベントや県出身者のマンガに乗せて全国に発信されるようになることが、「まんが王国とっとり」の希望なのではないだろうか。

付記

本報告は、平成26年度大妻女子大学戦略的個人研究費（課題番号 S2617 「ローカル・ソフトパワーとしてのマンガに関する理論的実証的研究」）の研究成果の一部をなすものである。なおこの小稿の作成にあたり、下記の方々のお話しをうかがうことができた。記して謝意を表したい。

2014年9月9日午後 境港市観光協会（担当者1名）

2014年9月9日午後 境港市役所商工観光課（担当者1名）

2014年12月24日午前 鳥取県庁まんが王国官房（担当者1名）

2014年12月25日午後 北栄町役場政策企画課（担当者2名）

2015年1月20日午後 新潟市役所文化スポーツ部 マンガ・アニメ担当（担当者2名）

2015年1月27日 高知県庁まんが・コンテンツ課（担当者1名）

この他調査に訪れた各地で多くの方々から有益なご示唆をいただいた。

註

(1) 当時の「ジャパニメーション」礼賛状況に関する当事者的批判として、(大澤・大塚2005)が参考になる。

(2) アンノン族については、難波(2007)が詳しい。

(3) 国政と地方政治とを問わぬ政治のエンターティメント化については、(新井2009)を参照。

(4) 水木しげるロードの発展過程についての記述に関しては、2014年9月に行った地元での

聴き取りと、そこで入手した資料、さらには境港市観光協会のトップとして活躍した舛田知身の著書(舛田2010)を参考にした。

(5) 水木しげるロードが境港市の経済と商店街に与えたインパクトについては、(澤田2009)を参考にした。

(6) 鳥取県の平成の大合併については、(山田2011)を参照。東部は当時の片山知事が、「鳥取市の帝国主義的蚕食」と揶揄したように鳥取市が多くの近隣町村を併呑していったが、中部の合併の事例は少なく、西部ではさらに少なくなっている。

(7) 青山剛昌の地元大栄町は、平成の大合併で北条町と合併し「北栄町」となった。北条町の人たちは、『青山剛昌ふるさと館』は、旧大栄町由良宿のもの』と考えていると、面談した行政担当者は説明してくれた。

(8) 鳥取県、高知県、新潟市というまんが振興に努める自治体の担当者のもとを訪れ、「なぜこちらでは多くの優れたマンガ家が輩出されたのか」と聴いた時の反応には興味深いものがあった。高知県の担当者は即座に「自由」・「反骨」の伝統をその理由としてあげた。新潟市の担当者は、雪に閉ざされ家に籠ることの多い、新潟の「こたつ文化」との関連をあげていた。鳥取県の担当者の答えは、「単純化して答えることはできない」というものであった。

(9) 野球の甲子園の「高校球児」に倣って、「まんが甲子園」の主催者たちは、同大会に集う高校生たちを「高校ペン児」と呼んでいる。

(10) 片山の鳥取県政改革の実績については、(田中2004)に詳しい。

(11) 1999年に初当選した片山は、2003年の知事選挙では、共産党も片山を評価したため、無投票での当選を果たしている。

参考文献

- 【1】 Nye, Josef, S. Jr 1990 *Bound to Lead The Changing Nature of American Power* Basic Books=久保伸太郎訳 1990 『不滅の大国アメリカ』読売新聞社
- 【2】 Nye, Josef, S. Jr 2004 *Soft Power means The Means to Success in World Politics*=久保伸太郎訳 2004 『ソフトパワー 21世紀国際政治を制する見えざるちから』日本経済新聞出版社
- 【3】 McGray, Douglas. *Japan's Gross National*

Cool (Foreign Policy. May/June, 2002)=2003 神山京子訳「世界を闊歩する日本のカッコよさ」『中央公論』第188巻第5号、中央公論社、2003年5月)

【4】 Vogel. E 1979 *Japan as Number One: Lessons for America* Harbard Univ. Press=広中和歌子、木本彰子訳 1979 『ジャパン アズ ナンバーワン: アメリカへの教訓』TBSブリタニカ

【5】 大澤信亮・大塚英志 2005 『ジャパニメーションはなぜ敗れるのか』角川Oneテーマ新書

【6】 経済産業省 HP・クールジャパン, クリエティブ産業

http://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/creative/ (2015. 06. 04 確認)

【7】 BBC NEWS HP
<http://www.bbc.com/news/world-europe-22624104> (2015. 06. 06 確認)

【8】 宮本憲一 1973 『地方自治はこれでよいのか』岩波新書

【9】 難波功二 2007 『族の系譜学—ユース・サブカルチャーズの戦後史』新曜社

【10】 平松守彦 1982 『一村一品のすすめ』ぎょうせい

【11】 石井清輝 2010 「まちづくりと文化—地域文化の育て方」(西原・油井編著2010所収)

【12】 西原和久・油井清光編著 2010 『現代人の社会学入門』有斐閣

【13】 田村秀 2014 『ご当地ものが日本を救う』祥伝社新書

【14】 新井克弥 2009 『劇場型社会の構造—「お祭り党」という視点』青弓社ライブラリー

【15】 岡本健 2013 『n次創作観光 アニメ聖地巡礼/コンテンツツーリズム/観光社会学の可能性』北海道冒険芸術社

【16】 舛田知身 2010 『水木しげるロード熱闘記 妖怪によるまちづくり 境港市観光協会の挑戦』ハーベスト社

【17】 澤田廉路 2009 「境港市の『水木しげるロード』整備と商店街の変容に関する考察」(『国際交通安全学雑誌』Vol. 34 No1 68-76頁)

【18】 平井一臣 2010 『首長の暴走—あくね問題の政治学』法律文化社

【19】米子市 HP : 「合併に関する出来事」
<http://www.city.yonago.lg.jp/3764.htm> (2015. 06. 10 確認)

【20】山田三矢 2011 「鳥取県の平成の大合併の経過とその後—鳥取県の広域行政の実態をモデルとして」(『政経研究』第48巻23号33-68頁 日本大学法学部)

【21】まんが王国とっとり公式 HP

<http://www.pref.tottori.lg.jp/mangaoukoku/> (2015年6月10日確認)

【22】まんが王国・土佐公式 HP
<https://mangaoukoku-tosa.jp/> (2015. 06. 10 確認)

【23】田中成久 2004 『「改革」の技術—鳥取県知事・片山善博の挑戦』岩波書店

Abstract

American political scientist Joseph Nye defined soft power as a power which can raise voluntary support in other Nations without using compelling force. Soft power is nothing but a Nation's charm.

Japan's Gross National Cool written by American Economist Douglas McGray in 2002 made the word soft power well known in Japan. Popular culture of Japan such as manga and animation, J-pop, TV drama, fashion, architecture, cuisine, has received enthusiastic support all over the world since the 1990s. While the economy were stagnant and Japan's "Gross National Product" (GDP) continued to decline, Japan's "Gross National Cool" was remarkably rising. McGray says, Japan, Which was economic superpower in the 1980s, becomes a super power of soft power in the early 21th century.

Soft power is the concept of international political science. To adapt soft power to a domestic phenomenon may seems to be incollect. However, Japan's local governments are exposed to fierce inter regional competition. Now tertiary industries becomes the major force of economy, and the Japan's big companies has been moving their factories abroad. So, such as factory attraction is out of date. Establishing the regional brand of primary products and the promoting of tourism becomes important for any region. The Local Governments cannot survive without demonstrating the fascination of the region. Inter regional competition in Japan can said to be the competition of the local soft power. The core of the "cool Japan" is its popular culture, especially manga and animations. So the attempts to use the manga and the animations closely related to their regions as the trigger of community development has been made throughout the country. The most remarkable succeed case among them is Mizuki Shigeru road, Sakaiminato city, Tottori Prefecture. The mighty efforts of the Sakaiminato citizens work together with various stake holders out of the region makes their city theme park of the monstrous being (youkai). Now over 3 million tourists are visiting Mizuki Shigeru road per year. The road becomes the most famous tourist resort of Tottori prefecture along with the Tottori-sakyu Sand Dunes.

Prefectural Governmen of Tottori declared the founding of "Manga Kingdom Tottori" in 2012. "Manga Kingdom Tottori" put up three prominent manga artists (Mizuki Shigeru, Taniguch Jiroi, Aoyama Gosho) coming from Tottori as the Icons, conducts various events such as the International Manga Expo. But "Tottori Manga Kingdom" is not getting enough understanding in the People of Tottori Prefecture.

Kochi Prefecture, as well as Tottori Prefecture, produced many notable manga artists, are also advocating "Manga Kingdom/ Tosa", has a long term tradition of culture ordinary people enjoy drawing manga. And "Manga Koshien" which has a long history over more than 20 years has been encouraging high school Manga Artist (koukoupenji) creating the cartoons implying the social criticism. "Manga Kingdom/ Tosa" appealing the close ties with the spiritual tradition of Tosa emphasizing the value of "freedom" and "rebellious" spirit and the tradition of its manga culture. "Manga Koshien", seems trying to breathe young spirit of "rebellious" and "freedom" through its challenges.

On the other hand, Tottori Prefecture lacks the tradition of ordinary people enjoy drawing manga, nor definite identity such as represented by the word "rebellious" and "freedom" in Kochi. Three great manga artists are powerful media, but sad to say, there are no messages to load with. This may be the reason why many people in Tottori seems to be embarrassed at the establishment of "Manga Kingdom Tottori".

(受付日 : 2015 年 6 月 20 日, 受理日 : 2015 年 6 月 30 日)

小谷 敏（こたに さとし）

現職：大妻女子大学人間関係学部人間関係学科社会学専攻教授

中央大学大学院文学研究科社会学専攻単位取得退学。

専門は現代文化論。若者や子どもの文化研究の一貫としてマンガに関する研究を行っている。

主な著書：『ジェラシーが支配する国』（高文研） 『子どもたちは変わったか』（世界思想社）